Macbeth における死

村上　世津子*

（平成 26 年 10 月 31 日受理）

Death in *Macbeth*

Setsuko MURAKAMI*

Besides Duncan and Banquo, many people are killed in *Macbeth*: Macdonwald, Cawdor, Macduff's wife and children, Lady Macbeth, and Young Siward. Their deaths not only prove the cruelty of Macbeth but irradiate his death. Cawdor's death suggests that a traitor can die with dignity. The death of one of the children of Macduff's impresses the audience with his kindness and courage. Young Siward's death also is not just a defeat. On the contrary, "his hurts before" prove he died a soldier's death. The same is true with the death of Macbeth.

At the end of the play, Macduff offers Macbeth's head to Malcolm. If "hurts before" prove a soldier's death, Macbeth also dies a soldier's death. For he is defeated because he chooses to fight, instead of yielding to Macduff. Furthermore, it is important that Macbeth's head is exposed. Among the soldiers killed in the play, only Macbeth and Macdonwald—commanders of the army—have their heads exposed. Cawdor and Young Siward do not. Macbeth's head exposed both to Malcolm's army and the audience proves that Macbeth dies a commander's death not just a soldier's death.

Key words: Macbeth, Cawdor, Macdonwald, Macduff, Lady Macbeth, Young Siward, death

1. はじめに

Macbeth が書かれたのは Gunpowder Plot の直後であり、陰鬱な世相を反映して *Macbeth* には死が満ちている。(Shakespeare Criticism 136 ： 98-99) Duncan 王や Banquo の死以外にも、1 幕 2 場では Macbeth が逆賊の将 Macdonwald を打ち破りその首を城壁にさらしたことが告げられる。1 幕 4 場では Norway 軍に与して祖国の破滅を謀った Cawdor の領主の処刑が執行されたことが告げられる。4 幕 2 場では舞台上で、観客の眼前で、Macduff の子供の一人が殺され、4 幕 3 場では殺されたのは一人だけでなく "wife, children, servants, all/ That could be found"(4.3.211-12)であることが告げられる。5 幕 5 場では Macbeth 夫人の死が告げられ 5 幕 7 場では舞台上で Young Siward が Macbeth の剣に斃され 5 幕 8 場でその死が語られる。そして劇の終わりでは Macduff が Macbeth の首を持って登場する。Duncan 王と Banquo 以外のこれらのおびただしい死は Macbeth の死をどう照射するのだろうか。

* 英文学（建築学科）准教授

2. Macdonwald 及び Cawdor の死と Norway

Macdonwald と Cawdor はともに逆賊である。両者とも Macbeth に打ち負かされて殺されるが両者の間には若干の違いがある。Macdonwald は逆賊の将であり Duncan 王軍に正面切って反旗を翻し Macbeth と直接対決して敗れて首を城壁にさらされる。

Cawdor は将ではなく Norway が率いる大軍を後方から支援していたにすぎないが、大逆が発覚して処刑される。Cawdor は謀反人ではあるが、王の許しを乞い、深く悔い改め、従容として死についたことを処刑立会人から聞いた王子が Duncan 王に報告する：

> That very frankly he confess'd his treasons,
> Implor'd your Higness' pardon, and set forth
> A deep repentance. Nothing in his life
> Became him like the leaving it: he died
> As one that had been studied in his death,
> To throw away the dearest thing he ow'd,
> As 'twere a careless trifle. (1.4.6-11)

Norway は Macdonwald が Duncan 王軍に反旗を翻すのを見、また Cawdor の援けを得て機に乗じて Scotland に猛攻をかけたが、Macbeth 率いる軍隊に威力を削がれる。彼は敵将ではあるが和を乞うたので１万ドル献納と引き換えに許される。

3. Macduff 妻子の死

3.1 Macduff の子供殺しと Macbeth

Macduff の妻子殺しは Duncan 王殺しや Banquo 殺しとは一線を画する。魔女たちが現出する幻影から "beware Macbeth"(4.1.71)と忠告された Macbeth は念のため Macduff を殺そうとするが、彼の殺戮計画は「時」に出し抜かれ Macduff は England に逃げた後だと知ると Macduff の城を襲い、彼の妻子や彼に連なるもの総てを皆殺しにする。Macbeth はもはや Duncan 王殺しの前のように逡巡もしなければ Banquo 殺しの前のように大義の欠如を取り繕うために刺客たちにくどくどと説明することもない。"The very firstlings of my heart"(4.2.147)を "the firstlings of my hand"(4.2.148)にすると宣言する。

Macduff の妻子殺しが Duncan 王殺しや Banquo 殺しと桁違いにおぞましいのは武人である Macbeth が弱さの代名詞である女子供を殺害するからである。皆殺しの対象として Macbeth が口にする "his babes"(4.2.152)という言葉は殺される子供の幼さを示唆する。殺害される子供の一人は "traitor"(4.2.46)の意味も知らないほど幼いのである。しかもただ幼くて弱いだけでなく、幼いながらも健気だからである。知力を尽くして父不在の寂しさと戦い、母を慰めようとするからである："Thou speak'st with all thy wit; And yet, i'faith, with wit enough for thee."(4.2.42-43)　しかも幼いながらも勇気があり刺客

に父を裏切り者呼ばわりされると言い返す: “Thou liest, thou shag-hair’d villain!” (4.2.82) そして刺客に切り付けられ死ぬ寸前でさえ母の無事を願う優しさを持ち合わせているからである : “He has kill’d me, mother: Run away, I pray you!” (4.2.83-84) Macduff の子供が示す健気さや勇気や思いやりは不安におののき思考を停止させ我が身を守るためなら他者を犠牲にすることを厭わない Macbeth の極悪非道を浮き彫りにする。Macduff の子供の殺害は舞台上で、観客監視下で起こるので Macbeth の堕落が観客に印象付けられる。

3.2 Macduff の子供の死と Macduff

Macduff の子供が示す勇気と思いやりが浮き彫りにするのは Macbeth の極悪非道だけではない。非力な存在でありながら刺客に気骨を見せ、母を守ろうとする Macduff の子供の振る舞いは Macduff 夫人が Rosse に語る雛を守るためにフクロウと戦うミソサザイを連想させ、妻子を残して England へ逃げた Macduff の情なしをも浮き彫りにする:“He loves us not: He wants the natural touch.”(4.2.8-9) Malcolm の下に赴いた Macduff がどんなに Scotland の窮状を訴え Malcolm に Macbeth 打倒のために決起を促しても妻子を惨状に置き去りにした不自然さは Macduff の熱弁から説得力を奪い、Macbeth 同様、見かけと実態が異なる foul な存在という印象を与えてしまう。

しかし Rosse から Macduff の妻子は Macbeth に皆殺しにされた旨の報告を受けた時の Macduff の反応は観客の Macduff 観を変える。Macduff は最初 Rosse の言葉の衝撃に押し潰され悲しみを言葉に表すこともできない。Malcolm に “Give sorrow words; the grief, that does not speak,/ Whispers the o’erfraught heart, and bids it speak”(4.3.209-210) と促されて初めて言葉を口にするが、Macduff が口にする言葉は Rosse の言葉を否定しなんとか慰めを見出そうとするものである: “My children too?”(4.3.211); “My wife kill’d too?”(4.3.213); “All my pretty ones? Did you say all?”(4.3.216-17) “Dispute it like a man”(4.3.220) と叱咤されたときの Macduff の言葉は印象的である : “I shall do so,/ But I must also feel it as a man.” (4.3.219-221) Macduff の言葉は男らしく悲しみに動じない非情の精神を持つことの意義を認めつつも人間として悲しみを感じることの重要性をも主張する。“man”の二つの意味、すなはち「男らしさ」と「人間らしさ」を対比する Macduff の言葉は Duncan 王殺しをする前の内実ともに fair であった時の Macbeth の言葉を想起する : “I dare do all that may become a man,/ Who dares do more, is none.”(1.7.46-47) 夫人に説得され “man”の人間としての思いやりや愛情の側面を切り捨て、暴力的な勇気の側面だけを追求した時に Macbeth は foul な存在に堕したのと反対に人間としての悲しみを感じる心を持つことの重要性を主張するときに foul に見えた Macduff が fair に変わる。そして妻子を殺害された悲しみや憤りのような人間としての感情が Macduff の勇気や闘争心に拍車をかける。

4. Macbeth 夫人の死

4.1 夢中歩行の前の Macbeth 夫人

この劇の初めで Macbeth を王殺害に駆り立てるのに大きな働きをするのは Macbeth 夫人である。Macbeth 夫人は夫を王位につけるには王殺害をしなければならないが、王殺害を実行するためには非情に徹さなければならないことを知っている。そのためにまず Macbeth 夫人自身が持っている赤子を慈しみ育む母性や他者の苦しみを憐れむ感情や他者を苦しめたり殺したりすることを妨げる、人間が本来身に着けている良心を捨て去り、魔女の領域に足を踏み入れようとする：“Come, you Spirits/ That tend on mortal thoughts, unsex me here,/ And fill me, from the crown to the toe, top-full/ Of direst cruelty!”(1.5.40-43) 無事王殺害をやり遂げ王妃の座につきさえすれば栄光に満ちた安穏とした日々が待っていると信じていたからである。しかし夫人の計算は殺害前に早くもほころびを見せる。彼女の顔を見て笑っている乳飲み子の脳味噌を叩き出すどころか、父の寝顔に似ているという理由で結局彼女自身は手を下すことができなかったからである。

Macbeth 夫人の計算違いが明白になるのは王妃の座に就いてからである。望みのものを手に入れても満足感が得られないどころか不安につきまとわれることに気付く。しかも王殺害の前には一心同体であった夫の心さえも夫人から離れていくのを感じる。彼女自身も王殺害と引き換えに得た地位の虚しさに悩まされつつも、祝宴の場で Banquo の亡霊に苦しめられる Macbeth が失態を演じれば可能な限り夫を叱咤激励し、宴を続行させようとするが、Macbeth がもはや彼女の力では取り繕いようのない醜態を演じた時に夫人は宴をお開きにし、客にお引き取り願う。客が帰り二人きりになった時に夫人は一言も夫を責めないが、これを機に彼女は表舞台から姿を消し、彼女が次に登場するのは 5 幕 2 場の夢中歩行の場面である。

4.2 Macbeth 夫人の夢中歩行

Macbeth 夫人の夢中歩行は Duncan 王殺害の直後で Macbeth が聞いた “Sleep no more”(2.2.34)という声を具体化するものである。劇の初めで Macbeth 夫人は悪霊に魂を売り渡せば後悔の念は感じなくなると思っていた：“Stop up th’access and passage to remorse.”(1.5.44)少しの水があれば手についた血を洗い流して証拠を隠滅できると思っていた。王位につきさえすれば人はその権威に楯突くことはできないから安泰だと思っていた。なるほど手についた血は物理的には少しの水で洗い流せるし、人々は表面的には Macbeth 夫妻に従う。しかし水は心の奥底についた血、すなはち罪悪感までも洗い流してはくれない。また表立って Macbeth 夫人の罪を非難する人がいないということは夫人が彼女の胸の内を打ち明ける相手がいないことをも意味する。

夫人が抱えている心の重荷を共犯者である夫に分ちあってもらいたくても Macbeth は夫人よりも先に罪悪感に押しつぶされそうになっている。彼女の支えになるどころか夫人の方が夫を支えているのである。しかも Duncan 王殺しの後夫人と Macbeth の間には隔たりが生じている。Duncan 王殺しの前には Macbeth は夫人に何の隠し立てもしなかったが Banquo

と Fleance を殺す計画は夫人には知らせないし、Macduff の妻子殺しについても同様である。なるほど Duncan 王殺し以降も夫人に対する Macbeth の愛は失われてはいない。Macbeth にとって夫人は “Love”(3.2.29)であり “dearest chuck”(3.2.45)であり続ける。夫人に対する愛情が残っているから夫人の心の病を治してくれと医者に命令する。本気で治してやりたいと思っているから心の病は医者の力の及ぶところではないという答えを聞くと医者に腹を立てて怒鳴りつけるのである。しかしながら Macbeth には夫人の心の病に向き合うだけの心のゆとりがない。それどころか 5 幕 5 場で夫人の死を聞いたときに Macbeth は悼むことすらできないのである。

Macbeth 夫人の夢中歩行を目撃して夫人の心の奥底に秘められた罪を知った時に医者は次のように言う: “This disease is beyond my practice: yet I have known those which have walk'd in their sleep, who have died holily in their beds.”(5.1.55-57)夢中歩行するほどの心の重荷に苦しみながらも安らかに死ぬことができる人とはどういう人なのか。その答えは医者の次のセリフの中に求められる: “More needs she the divine than the physician.”(5.1.71)医者の力では治すことができなくても夫人が心の内を率直に打ち明けることができる僧侶がいたなら彼女の心の病を癒すことができたかもしれない。4 幕 3 場で Macduff が、妻子が皆殺しにされた悲しみに押しつぶされずにむしろ悲しみを Macbeth への復讐心を研ぐ砥石に変えることができたのは彼が悲しみを表現することができたからである。

Macduff は被害者で Macbeth 夫人は加害者だから同列に論ずることはできないという反論があるかもしれない。しかしこの劇の中には加害者—しかも王に対する謀反人—でありながら立派な死に方をした人物も存在する。Norway 軍の後方を支援していたことが露見して Duncan 王に処刑される Cawdor である: “Nothing in his life/ Became him like the leaving it.” 王に処刑される謀反人でありながら Cawdor が立派な最期を迎えることができるのは、率直に罪を認め、王の許しを乞い、深く悔い改めて死ぬからである。

劇の終わり近くの Macbeth 夫人にも味方がいないわけではない。Macbeth は別にしても医者に夫人の病状を報告して医者自らに夫人の夢中歩行を目撃してもらう侍女や、王妃様に気を付けて危険なものを遠ざけておくようにと忠告する医者は Macbeth 夫人の味方である。しかし彼らとて積極的な味方になることはできない。夫人の秘めている罪はあまりにも重くて容易に口外できるものではないからである。救われるためには “the dearest thing”である命を捨てる覚悟で自己の罪と向き合うことが求められるが夫人にはその覚悟ができないし、夫人にその覚悟をさせる積極的な味方も存在しないからである。だから罪の重さに押しつぶされて哀れな最期—自殺—を迎えるのである。

5. Young Siward の死

Young Siward は 5 幕 7 場で Macbeth との白刃戦に敗れて死ぬ。*Macbeth* には死が満ちているが、舞台上で観客監視下の白刃戦での死は Macbeth と Young Siward の一騎打ちとその後の Macbeth と Macduff の対決だけである。劇の初めの逆賊の将 Macdonwald が Macbeth

の剣に斃れることは語られるのみであり、Cawdor は処刑され、Duncan 王は寝こみを襲われて死に、Banquo は刺客に殺され、Macduff 妻子と Macbeth 夫人は武人ではない。だからテキストではわずか 8 行を占めるにすぎないが Young Siward の死に様は印象的である。しかも彼の死は Macduff が Macbeth を倒し England 軍の勝利が確定し兵士たちが引き上げた後で Rosse によって語られる。

He only liv'd but till he was a man,
The which no sooner had his prowess confirm'd,
In the unshrinking station where he fought,
But like a man he died. (5.9.6-9)

肉親の死の知らせが深い悲しみを伴うことは言うまでもない。だから観客は向かい傷を受けて死んだなら息子は "God's soldier"(5.9.13)であるからこれで弔いの鐘は鳴らされたと言う Siward の言葉の背後に深い悲しみが隠されていることを感じる。Siward の悲しみを軽減するためにも十分な弔いが必要であると感じる："He's worth more sorrow."(5.9.16)

しかしその一方で Siward の言葉が単なる強がりではないことも確かである。Young Siward の死はやはり舞台上で提示され後に語られる Macduff の子供の死のような哀れさを観客に抱かせない。なるほど刺客の脅しに屈せず堂々と立ち向かって殺される Macduff の幼い子供の姿は劇の終わりで Macbeth と対決する勇敢な武人、Macduff の姿を彷彿させる。しかし武人の姿を彷彿させても Macduff の子供は武人ではない。刺客と幼子では幼子が殺されるのは自明だからである。凛々しい若者に成長する前に圧倒的な力によって未来を奪われるからである。それに対して Young Siward は成年に達したばかりとは言え武人である。武人の最高の美徳は勇敢である。向かい傷を受けて死んだということは死に至るまで勇敢であったことを証するものである。Scotland を暴政から解放するための一助になり最後まで勇敢に戦いその死に様が仲間に記憶されることは武人にとって最高の名誉であり、弔いであるからである。息子の死は悲しくても最高の死に方ができたことは一つの "comfort" であったと感じているから Siward は Macduff が Macbeth の首を持って登場するのを見たときに "Here comes *newer comfort*"(5.9.19 筆者強調)と言うのである。

6. Macbeth の死

6.1 Young Siward の死の報告と Macbeth の死の報告

Macbeth は Macduff との一騎打ちに敗れて死ぬ。勝者の Macduff は劇の終わりで Macbeth の首を持って登場して Malcolm に次のように言う："Hail, King! For so thou art. Behold, where stands/ Th' usurper's cursed head: the time is free." (5.9.20-21)また Scotland 王になった Malcolm は Macbeth との戦いの勝利に貢献した者の労に報いる他、次のことも行うと宣言する：

As calling home our exil'd friends abroad,
That fled the snares of watchful tyranny;
Producing forth the cruel ministers
Of this dead butcher, and his fiend-like Queen,
Who, as 'tis thought, by self and violent hands
Took off her life. (5.9.32-37)

Macbeth は Duncan 王を殺して王位を奪ったのだから彼は "usurper"である。Macbeth の悪は王殺しにとどまらず即位後も Banquo 殺しや Macduff の妻子殺しと殺人を重ね Scotland を荒廃させたのだから Macbeth を "butcher"と呼び、彼の首が "cursed"だと言うのは妥当である。また Macbeth はどの邸にもスパイを放って臣下の動向を探り Macbeth が怪しいと思った者は謀反人とみなされる恐怖政治を敷いたのだから彼の統治を "snares of watchful tyranny"と呼ぶことも妥当である。さらには Macbeth が倒れて初めて Scotland は暴政から解放されたのだから Macbeth の首を差し出して "the time is free"と言うのも妥当である。このように劇の終わりで Macduff と Malcolm が Macbeth の生涯を総括する言葉は全く正しいにもかかわらず観客は彼らの総括に反発を覚える。この反感はどこから来るのであろうか。

観客の反発の引き金を引く大きなきっかけになるのは Young Siward の死の報告を受けた時の Siward の返答とそれに対する Malcolm の言葉である。"his knell is knoll'd"(5.9.16)という Siward の淡々とした言葉の中に息子を失った Siward の抑制された深い悲しみを感じるから観客は Malcolm と同様に "He's worth more sorrow"(5.9.16)と思うが、この反応は劇の終わりで Macduff や Malcolm が総括する Macbeth 夫妻の言葉を聞いたときの観客の反応に作用する。Macbeth 夫妻の生涯を総括する Macduff と Malcolm の言葉に嘘はない。しかし彼らが提示する Macbeth 像は一面的である。Macduff と Malcolm は Macbeth の負の側面だけを強調するが、観客は Macbeth のプラスの側面をも見てきたからである。Malcolm と同様に Young Siwrd の死にはもっと敬意を払われるべきだと感じた観客は Macbeth の生涯がよりいっそう不当に扱われていることに憤りを覚えるからである。

6.2 Duncan 王殺しをする Macbeth

"shalt be king hereafter"(1.3.50)という魔女たちの予言を聞く前から Macbeth が Duncan 王殺しを考えていたことは確かである。そんなにも "fair"(1.3.52)に聞こえる魔女の予言を聞いたときに Macbeth がどきりとしておののくのは Macbeth にやましさが存在していたことを示唆する。しかも Banquo に魔女の予言を信じることの危険性を指摘された直後の傍白では "murther"(1.3.139)を口にする。しかしながら Macbeth の心の内にある "murther"は "fantastical"(1.3.139)なものにすぎない。Macbeth は勇猛果敢な武将であるが決して嗜虐的な人物ではない。むしろ Macbeth は王殺しをするには "too full o'th' milk of human kindness"(1.5.17)である。Macbeth は王殺しをする前に何度も思い悩む。王殺しはそれを実行した時に終わりになるのではなくて必ずこの世で裁きを受けることを考え

る。そして王殺しをしない理由―(1)Macbeth は Duncan 王の臣下である；(2)彼自身が殺すどころか敵の攻撃から王を守るべき主人役である；(3)Duncan 王は温厚な性格をしている(4)しかも王は Macbeth の戦場での働きに報いてくれたばかりである―を思いめぐらして王殺しはやめようという結論に達する。もし夫人が王殺しをやめようという Macbeth の提案を受け入れていたならこの時点で王殺し計画は立ち消えになったであろう。

Macbeth の提案を受け入れるどころか夫人は猛然と Macbeth を攻撃する：

> Was the hope drunk,
> Wherein you dress'd yourself? Hath it slept since?
> And wakes it now, to look so green and pale
> At what it did so freely? From this time
> Such I account thy love. Art thou afeard
> To be the same in thine own act and valor,
> As thou art in desire? (1.7.35-41)

夫人にあてた Macbeth の手紙から明らかなように Macbeth にとって夫人は“my dearest love”(1.5.58)である。また武人にとっての最大の恥辱は臆病である。上に引用した Macbeth 夫人の言葉は夫人に対する愛と武人の恥辱という Macbeth の最大の弱みを突くものであったから Macbeth は夫人に説得されるのである。

Macbeth を“butcher”と呼ぶのが的外れであるのは Duncan 王殺しの後の Macbeth の苦しみから明白である。“butcher”は家畜を殺しても良心の痛みを感じることはない。しかし Duncan 王殺しをした Macbeth は、王殺しは神に対する反逆であるから魂を悪魔に売ってしまったことを強く意識している。だから“God bless us”(2.3.29)という言葉を聞けば“Amen”(2.2.28)と言うのは幼い頃からの習慣で条件反射的に出るはずの言葉なのに神の恵みが最も欲しい時に“Amen”という言葉が喉につかえて出なくなってしまうのである。また眠っている Duncan 王を殺した自分には安らかな眠りは失われてしまったと感じる。Macbeth の罪悪感はあまりにも強いので“All great Neptune's ocean”(2.2.59)をもってしても彼の手についた血を洗い流してくれないどころかむしろ彼の手についた血が“The multitudinous seas incarnadine,/ Making the green one red”(2.2.61-62)に変えてしまうと感じる。

6.3 Banquo 殺しをする Macbeth

Duncan 王殺しで精力を使い果たしそれ以上悪を積み重ねようとはしない夫人と異なり Macbeth は Duncan 王殺し後も殺人を重ねていく。王殺しの罪を護衛の者たちに転嫁しただけでは不安を抑えることのできない Macbeth は口を封じるために護衛の者を殺す。その後は魔女の予言の後半―Banquo の子孫が王になる―が気になりだし Banquo と Fleance を暗殺する計画を立てる。Duncan 王殺しの前と対照的に夫人は消極的ながら Macbeth の殺人を思いとどまらせようとする。しかし殺人を考えるのは Dunkan 王殺しで終わったはずだとい

う夫人の言葉も “Nature's copy”(3.2.38)は永続するものではないから Banquo や Fleance のことを気にする必要はないという夫人の言葉も Macbeth の心を動かすことはない。夫人の助けを得られないことを知った Macbeth は夫人に知らせず彼自身の判断で殺人を行うことを決意する。Duncan 王殺しの前に悪霊たちに女で失くしてくれと嘆願したのは夫人であったが 3 幕 2 場で “seeling night”(3.2.46)に “great bond”(3.2.49)をずたずたにしてくれと祈るのは Macbeth である。

とは言え Banquo と Fleance 殺しに乗り出す時に Macbeth の良心が失われてしまっているわけではない。Banquo 殺しの意義を刺客に語る Macbeth の台詞は冗長である。Macbeth は王なのだから一言 Banquo を殺せと命じれば済むはずである。冗長な説明をしなければならないのは Macbeth が心の中にやましさを感じているからであり冗長な説明は刺客を説得するためというよりも Macbeth 自身を説得するために必要である。また Macbeth が刺客を説得しようとするときに彼らの男らしさや Macbeth の寵愛に訴えかけようとすることも重要である。Macbeth は彼と同様に刺客もまた男らしさや愛という大義のためには殺人を選ぶと思うからであるが、それと同時に、最終的に王殺しを選択した自分の決断が正しかったと自らを納得させたい気持ちも潜んでいるものと思われる。(Kent, 223)

Macbeth の良心の存在をより雄弁に伝えるのは、刺客から Banquo 殺しには成功したものの Fleance は逃げたことを知らされたときに Macbeth が発作に襲われることである。Macbeth は宴会のホスト役であることを忘れてしまって不自然なまでに長時間席を外すので夫人が呼びに来なくてはならない。夫人に促されて再び宴に加わり乾杯の音頭を取ろうとするが、Banquo の不在をなじる言葉を口にすると Banquo の亡霊が現れ Macbeth は我を忘れてしまう。夫人に叱咤激励されていったんは気を取り直すが祝杯を挙げるときに “Would [Banquo] were here”(3.4.90)と言うと Banquo の亡霊が再び現れる。Macbeth はまたもや我を忘れて亡霊に悪態をつき決闘を挑む。もはや夫人も Macbeth の失態を取り繕うことができなくなり宴はお開きになる。

6.4 祝宴の場以降の Macbeth

秩序と調和を象徴し Macbeth の権威と栄光の演出を目的とする祝宴で大失態を演じた Macbeth は一線を越える。流血の中にここまで踏み込んでしまった以上元には戻れないと思った Macbeth は殺人についての思考が生ずるや否や実行することにする。そして宴会を欠席した Macduff を怪しみ殺害を企てるがすでに逃亡した後だと知ると怒りの矛先を妻子に向けて主人不在の一家を皆殺しにする。Macduff の妻子殺しの残虐さについては先に述べたのでここでは触れないが、Macbeth の暴政は誰の目にも明白になる。その結果多くの諸侯が脱走してしまい残っている臣下は命令で動くだけで忠誠のかけらもない。Macbeth が魔女の予言にしがみついて戦い抜く決意を口にしつつも人生の虚しさを感じているときに夫人の死が伝えられる。夫人の死を聞いた Macbeth は次のように言う。

> She should have died hereafter:
> There would have been a time for such a word,—

To-morrow, and to-morrow, and tomorrow,
Creeps in this petty pace from day to day,
To the last syllable of recorded time,
And all our yesterdays have lighted fools
The way to dusty death. Out, out, brief candle!
Life's but a walking shadow; a poor player,
That struts and frets his hour upon the stage,
And then is heard no more: it is a tale
Told by an idiot, full of sound and fury,
Signifying nothing. (5.5.17-28)

上に引用した台詞は一方ではMacbethにとって人生とは "a tale/ Told by an idiot, full of sound and fury,/ Signifying nothing"になってしまっているので一心同体であった夫人の死に反応することもできなくなっていることを能弁に伝えるものであるが、他方では見事なまでに夫人の死に様に照応した台詞である。夫人の死は自殺—つまり人生に何の意味も見出せなくなり絶望した結果—によるものだからである。

Macbethと夫人の言葉や行動の間には呼応関係が存在する。(Brooke, 10-19) Duncan王殺しをする前の "Come, thick night"(1.5.50)と言う夫人の台詞は "Come, seeling Night"(3.2.40)と言うMacbethの台詞と呼応する。また私ならいったん誓ったら乳房に吸い付く赤子の頭をたたき割ってでも実行するという幼児殺しに関する夫人の台詞はMacbethによるMacduffの妻子殺しで現実化する。さらにDuncan王殺し直後のMacbethの大海の水をもってしてもこの手についた血を洗い流してくれないという台詞はアラビア中の香水をもってしてもこの手をかぐわしくはしてくれないという夫人の台詞と呼応する。そしてMacbethは眠りを殺したからMacbethに眠りはないという台詞は夫人の夢中歩行で現実化する。Macbeth と夫人の間の台詞や行動の呼応は二人の結びつきの強さを示唆するだけでなく彼らの罪やその報いを増幅させる働きをもしてきた。夫人の死にも反応することができないMacbethの虚無感を表す台詞は人生に何の意味も見いだせずに自殺した夫人の行動と照応し、彼らが受けた罰の大きさを印象付けるとともに一心同体であったMacbethと夫人の関係の集大成をなすと言える。

しかし重要なことは上に引用した台詞はMacbethの最終的な人生観を要約する言葉ではないことである。Macbethが虚無感に満ちた台詞を口にした直後に使者が登場してBirnamの森が動いているように見えたと報告する。人心を失っても魔女のまじないにすがって生きてきたMacbethはもはや "Macbeth shall never vanquishe'd be, until/ Great Birnam wood to high Dunsinane hill/ Shall come against him"(4.1. 92-94)というまじないが通用しないことを悟る。Macbeth は、一時は太陽が嫌になり宇宙が破滅すればよいとさえ思う。しかしすぐに気を取り直して "At least we'll die with harness on our back"(5.5.52)と言う。royal weの使用と鎧を身に着けて死ぬことへのこだわりは虚無的な言葉にもかかわらずMacbethが王者としての、また武人としての誇りを失ってはいないことを示唆する。

さらには魔女のまじないが通用しなくても戦うことを選ぶことは、魔女のまじないに支配されてきたMacbethが自由意思で行動しようとし始めたことをも示唆する。

とは言えこの段階ではMacbethはまだ完全に魔女のまじないから自立しているわけではない。もう一つのまじない、つまり“none of woman born/ Shall harm Macbeth”(4.1.80-81)を心の拠り所にしているからである。Macbethが避けてきたMacduffとの対決が回避できないものであることを知った時にMacbethは最初、女から生まれた者には負けないという魔女の呪文にしがみついて戦おうとする。MacbethはMacduffが“from his mother's womb/ Untimely ripp'd”(5.8.15-16)だからこの呪文も通用しないことを知った時に初めて魔女の二枚舌に弄ばされてきたことをはっきりと理解し戦意を失う。しかしMacduffに“Then yield thee, coward,/ And live to be the show and gaze o'the'time”(5.8.23-24)とけしかけられると戦意を取り戻す。そしてもはや何のまじないも通用しないことを認識した上で真っ向からMacduffに勝負を挑み最後まで戦い抜く。

6.5 Macbethの死に様と他の登場人物の死に様

劇の終わりでMacbethは勝利の象徴としてMacduffがMalcolmに差し出す首として登場する。Macbethの首は一義的にはMacbethが敗れたことを証するものであるが、それは同時にMacbethが武人として最後まで戦い抜いたことをも証する。Duncanに和を乞うて生き延びるNorwayと異なり、生きて見世物になるか真っ向勝負して死ぬかの選択を迫られたときに後者を選択したから殺されて首を切り落とされたのである。最後まで戦い抜いた結果としての死は直前で語られるMacbethに真っ向勝負を挑み殺されたYoung Siwardの死を想起する。Youg Siwardの死に様の報告に関して語られるように戦場で怯まず最後まで戦い抜くことが武人としての務めを果たすことであり、それ以上立派な死が存在しないならMacduffに真っ向勝負を挑み敗れて首を切り落とされたMacbethもまた武人としての死を遂げたことになる。

Macbethの死に様は劇の初めで語られる逆賊の将Macdonwaldの死に様とCawdorの死に様をも想起する。Macdonwaldは敵ながら勇猛に戦ったがついにはMacbethに斃されてその首が城壁にさらされた。Young Siwardは兵卒であるから殺されても首が切り落とされることはないが、Macdonwaldは敵将であるから単に殺されるだけでなく首が切り落とされDuncan王軍の勝利の証として城壁にさらされるのである。とするならば劇の終わりでMacbethの首がさらされることはMacbethが単なる一介の勇敢な武人として死んだのではなく武将として死んだことを観客に印象付ける。

CawdorはNorwayに対する後方支援が発覚して処刑されるが、彼について特筆すべきことは謀反人であるが死に様が立派であったことである。彼は“the dearest thing he ow'd”(1.4.10)である彼の命を“a careless trifle”(1.4.11)であるかのように投げ捨てて従容として死についた。許しを乞うて死につくどころかMacbethは許しを乞うこと—“yield”すること—を蹴り戦い抜くことを選んだのだからMacbethの死に様はCawdorの死に様と対照的であるように思える。しかし謀反人でもその死に様が人に語り継がれる立派な死に方が可能だということは人の価値は死の瞬間まで決定できないことを示唆する。

Macbeth は “what [Cawdor] hath lost”(1.2.69)を受け継いだ。Macbeth が受け継いだものは Cawdor の地位や領地と謀反人という称号だけではない。形は異なるが立派な死に様も受け継ぐのである。

最後に Macduff の子供の死が Macbeth の死をどの様に照射するのかについて考えたい。先に非力な存在でありながらも刺客に切られて死ぬ寸前でさえ母の無事を願う健気さは Macbeth の極悪非道だけでなく妻子を残して England に逃げた Macduff の情なしをも浮き彫りにする。しかし妻子皆殺しの報告を受けた Macduff が人間としてその悲しみに打ちひしがれ、それを乗り越えて男らしく闘う決意をするときに、情なしで “foul”に見えた Macduff が人間としての感情を備えた “fair”な存在に転ずると述べた。同様のことが Macbeth にも当てはまる。Macduff の子供の死に直接影響されるわけではないが妻子を皆殺しにされた “grief”(4.3.228)を “anger”(4.3.229)に変えた Macduff と戦うことを選ぶときに Macbeth の人生は “a tale told by an idiot, full of sound and fury,/ Signifying nothing”から武人としての、王者としての誇りをかけた戦いをする意味のある人生に変わる。

7. 結び

Macbeth の中では Duncan 王と Banqo 以外にも多くの死が取り扱われている。Macbeth の犠牲者の死は Macbeth の残虐性を証明するだけでなく、彼らの死に様は Macbeth の死に様を照射する。Cawdor の死は謀反人でも立派な死に方ができることを教える。Mcduff の子供は非力な存在でありながら権力に屈さず死にゆく瞬間でさえも母を思いやる。彼は雛（母）を守るためにフクロウ（刺客）と戦うミソサザイである。Macduff の子供の死は哀れさを誘うだけでなく健気さや男らしさをも印象付ける。Young Siward の死もまた単なる敗北ではない。立派な若者の死が父にとって悲痛であることは言うまでもないが、向かい傷を受けての死は彼が怯むことなく最後まで戦い抜き、武人としての死を遂げたことを証するものである。同様のことは Macbeth の死についてもあてはまる。劇の終わりで Macduff が勝利の象徴として Macbeth の首を Malcolm に差し出す時に Macbeth の残虐性が強調される。Macbeth が残虐性を有していることは確かであるがそれは Macbeth の一面にすぎない。観客は劇の初めで敵と勇敢に戦う Macbeth や Duncan 王殺しをする前に逡巡する Macbeth や Duncan 王殺しをした後で激しい良心の呵責を覚える Macbeth や悪の道を突き進まざるを得なくなった Macbeth をも見てきた。また敵と対峙した時に一歩も退かずに死ぬことが武人らしい最期であるなら Macbeth も逃げずに戦ったからこそ Macduff に殺された。さらには、*Macbeth* は殺人に満ちているが、首がさらされるのは劇の初めで Macbeth に切られた逆賊の将 Macdonwald と Macbeth だけである。Cawdor や Young Siward も武人であるが Cawdor は謀反人とは言え Norway を後方支援していた小者であるから処刑すれば十分であり、Young Siward は一介の兵卒にすぎないからその首は大した重きを持たない。それに対して Macdonwald の首が城壁にさらされるのは彼が逆賊の将だったからである。同様に劇の終わりで Macduff が Malcolm に Macbeth の首を差し出すのも彼が武将―王―だったからである。

Macduff が Malcolm に差し出す首は Macbeth が武将としての生涯を全うしたことを証するものであると言えよう。

*テキストは Shakespeare, William. *Macbeth*. Ed. Kenneth Muir. 1951. London: Methuen, 1987. を使用した。

引用文献

Brooke, Nicholas. Introduction. *The Tragedy of Macbeth*. By William Shakespeare. 1990. Oxford: Oxford UP, 2008. 1-81.

Cartwright, Kent. "Scepticism and Theatre in *Macbeth*." *Shakespeare Survey* 55 (2002): 219-36.

Shakespeare Criticism. Ed. Michaell Lee. Vol. 136 Detroit: Gale, 2011. 98-103.

Shakespeare, William. *Macbeth*. Ed. Kenneth Muir. 1951. London: Methuen, 1987.